

都市の空間管理に関する考察 そのホスピタリティ空間のあり方

小浪博英

本論文は東京女学館大学紀要第4号（2007年3月）に登載されたものである。

要旨

魅力的な都市地域形成のためには都市の空間計画または空間管理が非常に大切である。本稿はホスピタリティの観点から更に魅力的な都市空間を創造する方策について考察したものである。その結果、次のような諸点が結論として指摘された。

- (1) 都市のホスピタリティ空間とは公共空間と民間空間との調和の上に成り立っている。
- (2) 公共空間は優れた民間空間を誘導する役割をもつ。
- (3) 公共空間での工夫の主たるものは電線類の地中化、横断歩道橋の撤去、ストリートファニチャーの設置、照明の工夫、案内標識の整備、緑化などである。
- (4) 上海の公園のように、健康器具を設置するなどのちょっとした工夫で公共空間が有するホスピタリティ機能を向上させることができる。
- (5) 広場空間は我が国においては歴史が浅く、十分こなれていない。地下街と合わせてその設計、利用方法、管理方法などを更に研究する必要がある。
- (6) 民間空間はそれぞれに工夫が必要とされる。この場合、歴史的地区などのように伝統に基づくルールが存在する場合は、それに基づいて地域が協力することにより優れたホスピタリティ空間を形成することができるが、そうでない場合は建築協定、地区計画、まちづくり総合支援事業などを活用して地域の共通目標や調和を生み出すことが必要となる。

建築物について考察してみると、代価を要求しないホストとゲストとによる本来のホスピタリティ空間が消滅しつつある。人件費の高騰や競争の激化によるものと思われるが、もっと設計上のゆとりを持ってホスピタリティ精神に基づく配慮をすることが必要である。

- (7) 都市のホスピタリティ空間を時系列的にみても、その形態は時代と共に変化してはいるが、本質的に目的、もてなしの方法などに変化は無く、一部が自動化、IT化するとしても、十分に時間を超えて伝承できるものと考えられる。
- (8) いずれにしても、そこに住む人々のホスピタリティ精神がゴミのない美しいまち、色彩や建物の整っている落ち着いたまち、また来たくなるような情を感じるまちを形成するので、公共空間が率先して景観や歴史を形成し、民間が歴史、文化、飲食物、人情、スポーツ・買い物等の何らかの楽しみを通じて来訪者にまた来たくなる印象を与えることが必要である。そのためには地域に密着した大人と子供の交流空間を提供するとか、寺社を中心にした行事などにより地域の人々の交流を促進させる努力も必要であろう。

キーワード：空間計画、空間管理、ホスピタリティ、都市の魅力

1 序論

第二次世界大戦後の我が国の国土政策は荒廃からの復興が第一で、そのため治山治水、電力開発、鉄道・港湾・道路の整備、圃場整備、工業の振興、都市の整備、住宅の建設などを効率よく行ってきた。近年では新幹線、高速道路、空港、高度情報施設などの整備に力点に移り、更に、一旦は郊外に、あるいは地方や世界に分散化する傾向を見せていた人口・産業が再び大都市圏へ集中する勢いを見せ始めている。それに伴い全国各地に高さ100メートルを超える超高層ビルが出現し、東京圏では住宅や大学の都心回帰現象まで生じている。その結果として都市空間のホスピタリティ精神が減退し、人心が荒廃していくことを防止するための空間管理が必要であると考えられる。

本来、これらの空間管理は都市計画の中で行われるものであり、例えば昭和43年以前の都市計画では東京都心部の建築物は高さ33メートルを超えてはいけなかった。そのため、丸の内や銀座のビルが概ね8階建てで揃っていたのである。ところが、我が国の都市計画に容積率の概念を導入して、容積率800%でも敷地の半分を空地にすれば16階建ての建物が建つようになった。更に特例として、地区計画により本来の容積率とは別に特別な容積率や建物高さの制限ができるようになり、敷地周辺の整備状況を勘案して高さ200メートルを超える超高層ビルも建てられるようになった。横浜のランドマークタワーは295メートルの高さである。東京圏においては、このように100メートル、200メートルのビルは最早珍しくなく、住宅でさえ武蔵小杉で工事中の超高層マンションは59階建て、200メートルである。

本論は、このような都市空間の一種の乱れに対し、ホスピタリティの観点から空間管理のあり方を論じるものであり、2006年5月に日本ホスピタリティマネジメント学会関東支部で発表した「都市におけるホスピタリティ空間」¹⁾、および、同年7月に日本ホスピタリティマネジメント学会全国大会で発表した「人と子供の交流のためのホスピタリティ空間に関する考察」²⁾に加筆したものである。

2 都市のホスピタリティ空間

都市のホスピタリティ空間とは、居住者が訪問者に対してホスピタリティ精神を発揮できる都市の空間と考えることができ、その存在価値は居住者の居住満足度が高く、かつ、訪問者が再度来たくなるかどうかということにある。そこには公共空間と民間空間とがある。公共空間とは都市を訪ねる不特定多数のゲストに対して、その都市を案内し、必要に応じて休息や必要な支援をする空間である。これは公園や広場であったり、道路そのものであったり、また、公共建物であろう。一方、民間空間は公共空間以外の都市空間が全てその対象となる。中でも旅館や観光施設などは主たる目的がホスピタリティ精神の支援である。先ずこれらの空間について考察してみる。

2-1 公共空間は民間空間と一体となって効用を発揮する

現在盛んに議論されている都市景観論はゲストの第一印象を良くすることと、居住者の満足感を増大させようとするものである。この場合大切なことは公共空間とその周辺の民間施設とが調和を保っていることである。

写真1は江戸時代の景観を再現した川越のまちなみである。ここで気がつくことは、道

路という公共空間が沿道の建物と一体となって江戸時代を演出していることである。それに日よけの笠やかき氷のベンチが加わって一層ホスピタリティ空間を引き立たせている。ヨーロッパではここに牛車などが入ってきて、交通空間とホスピタリティ空間との分離が始まったのであろうが、日本では平安時代の絵巻に見る如く、牛馬を去勢しないために暴れるので、牛車・馬車を一般の都市交通には使うことができず、代わって人力の車が使われたということで、交通空間において好ましい人間空間が形成されている。



写真1 川越の小江戸

写真2は大阪の空堀商店街であるが、ここからは川越のようなホスピタリティ精神は伝わってこない。



写真2 大阪・空堀商店街

この両者を見ていると、川越のまちでは日傘に見られるように、いかにもゲストに対する思いやりの気持ちが伝わってくるが、空堀の方は来たかったら勝手に来てちょうだいという感じである。もちろん観光目的のまちと、一般の生活のまちとの違いはあるが、空堀だって顧客が来てくれないことには生活が成り立たないことに変わりはないのである。

公共空間である道路だけを見れば、両者とも似たような幅員であり、舗装が普通の舗装か化粧舗装かの違いはあるが、それほどの差があるとは言えない。問題は両側の商店である。川越においては地元の協議会があって、飾り付けひとつとってもご近所との相談づくで決めているとのことであるが、空堀など一般の商店街では地元商工会はあっても、そこまでの相談をしているとは思えない。つまり、地元はその意識と組織がある場合と無い場合とでこれだけの差になるのである。

2 - 2 公共空間は好ましい民間空間の演出者である

公共空間がしっかり整備されれば、民間空間もそれなりに工夫されてくることはよく知られている。

写真3は東京・飯田橋で実施された再開発事業地区の一部であるが、街路樹は未だ小さいものの、建物と道路のバランスが実に良く調和している。多分建築主が道路の計画をよく勉強して、それに合わせた設計をしたものであろう。



写真3 東京・飯田橋

旧地域振興整備公団の鳥取ニュータウンでは、道路と宅

地との間の民地側の塀をセットバックすることにより20センチくらいの花壇空間を設け、その花壇を各宅地で管理してもらうことにより心温まる景観を形成している。また、訪日外国人が日本の住宅地を訪ねて最初に指摘することは道路にゴミが落ちていないことである。一方、商店街に行くとチラシなどが捨てられており、住宅地ほどきれいにはなっていない。テロ対策のため多くの公共空間からゴミ箱が撤去されているのは残念である。

公共空間での一般的工夫を見てみると、道路では透水性舗装、カラー舗装、インターロ

ッキング舗装、石張りなどのほか、電線類の地中化、街路樹や花壇の整備などが行われている。歩道が更に広がったり、専用歩道になったりしている場合はこれらに加えて彫刻やベンチなどのいわゆるストリートファニチャーを設置、夜間照明の工夫などが行われる。これらはいずれも沿道の民間空間を更に好ましい方向に誘導しようとするものである。しかし、決定的に道路空間を壊しているのは横断歩道橋と電線等の空中線であろうことには疑問の余地がない。

2 - 3 公共空間での工夫がホスピタリティ精神を向上させる

これは海外での例であるが、写真4と5は上海の公園にあった健康遊具である。これらの他に、四十肩を治すぶら下がり器、裸足で歩いて足裏を刺激する踏み石なども置いてあった。こういうものがちょっと置いてあるだけで利用者相互のコミュニケーションが生まれてくる。画一的な植樹、花壇、砂場、鉄棒よりも実質的優れているように感じられるが、我が国においては怪我などの心配で設置できないのであろうか。写真6は香港での歩道上の案内表示である。これなどは高齢者に見やすく費用もかからないという一石二鳥の効果があるように思われる。無料という意見もあるかもしれないが、ホスピタリティの観点からはむしろ好ましいのではないだろうか。ついでに歩道の至る所に方角とバス停への距離、近くの有名ビルの名称などが書いてあったら便利だと考えられる。いちいち瀟洒な表示板を用意するのも、景観の観点からは一概には否定できないが、便利さを追求するのも公共空間の使命のひとつであり、そのための工夫はいくらあっても良いのである。



写真4 手指を刺激板



写真5 ツイスト円盤



写真6 歩道上の案内表示

2 - 4 多様な目的に対処しなければならない公共広場

ヨーロッパの街と我が国の街との大きな違いは広場であろう。ヨーロッパの街においては教会の前、行政機関の前、交通結節点などに大概広大な広場やサークルがあり、それらが集会、市場、交通処理などの用に機能している。我が国においては馬車や牛車が都市交通としては普及しなかったため交通広場の歴史が無く、仮にお祭り広場があったとしても、それは境内地であったり、河川敷であったりして西欧での公共広場のような形態にはならなかった。

しかし、近代になって都市が拡大し、自動車が発達してくると事情は変わってしまった。市役所前などにおいて各種イベントのためのスペースやシンボリック空間としての広場の必要性が発生するとともに、自動車とバス、自動車と鉄道等の交通機関相互を結節するための広場の必要性が生じてきた。

特に鉄道駅の駅前においては、鉄道の初期の時代には蒸気機関に対する火災等の危惧と、

運賃が比較的高かったため駅前が庶民の広場になることはなかったが、近年においては鉄道が庶民の足となって、駅前には商業施設が集積するようになり、広場の機能が単に交通の結節のためだけの機能ではなくなってきた。つまり、欧米の教会前広場などのように習慣的に人が集まる場所として、本来の広場的性格を強く持つようになった。このため広場に求められる機能としては、都市の修景のため、災害時の防災・救援のため等の機能をも期待されるようになってきた。

このような多様な目的が期待されるようになると広場設置者はいわゆるマニュアル通りに作れば良いということではなくなり、そこに広場利用者の利便を考慮したホスピタリティ精神が必要とされるのである。駅前広場を例に取れば、かつては鉄道利用者に必要な面積を確保すれば良かったが、現在では周辺商業施設との調和、シンボル空間としての景観、災害時の利用勝手の良さなどが求められるようになった。

2 - 5 混乱する地下街

地下街は公共空間というのにはあたらないかもしれないが、近年、全国各地に建設される一方、その空間は必ずしもホスピタリティ精神が発揮されていない。それらは次の通りである。

- ・一旦地下に入ってしまうと方角がよく分からない。
- ・案内が地下街の管理者毎に異なり、統一性がない。
- ・天井が低い場合は圧迫感がある。
- ・多くの場合出入口が狭い階段となっており、利用者は不快を感じる。

多くの地下街は道路や広場の地下に設置され、たとえ利用形態が店舗となってもそれは公的な空間の一部であることから、上記のようなことが起こらないような配慮がなされるべきであり、また、そのための研究が遅れていると言わざるを得ない。地下街の入り口が扉のない広いスロープで、「緑陰のある坂道を降りていったらそこに地下街があった」くらいの設計上のゆとりと配慮が欲しいものである。

このような問題に対して渡辺裕康は修士論文「大規模閉鎖空間における空間認知に関する研究」³⁾の中で、大規模閉鎖空間における認知的錯誤の分類を選択の錯誤、方向の錯誤、距離の錯誤、位置の錯誤、区画の錯誤、高度の錯誤に分類し、それへの対応として標識による対応、塗装による対応、構造的要素による対応、地図による対応が必要であるとしている。これなどは地下街におけるホスピタリティ精神のあり方を示唆していると考えられる。

2 - 6 ホスピタリティ精神の不足する民間空間

民間空間については川越の小江戸や浅草の仲見世のようにまち全体でホスピタリティ精神を発揮している場合と、多くの商店街のように個々のお店などがそれぞれに工夫している場合とに分かれる。前者の場合は何らかの伝統に基づいてルール化されたホスピタリティ空間が形成されているのに対して、後者の場合は地元の組織がしっかりしていないと混乱を生じることとなり、ひいては地域間競争に負ける原因ともなる。民間空間の管理に関しては次のような事項に関して日頃から地域の識見を磨いておく必要がある。そのため、

当該地域について歴史的価値と建物等の老朽度、現在の土地利用の持続可能性、来駕医者の特性と見通し、景観・建築物・看板等の計画、地元の組織作りなどを検討することが必要となる。

ホテル、レストラン等の民間建築物については、東京駅の丸ビル、六本木ヒルズ、表参道ヒルズなどに人気が集まっているが、本来のホスピタリティ空間と商業空間（サービス空間）との区別が必要になってきたといえる。つまり、最近の商業空間においてはホスト不在と言わざるを得ない状況が出現している。ホスピタリティ空間は代価を求めない案内空間であり、休息空間であり、おもてなし空間であろうが、最近の開発地区からはそのような空間が消えてしまった。どこもかしこも利益追求空間である。せめて緑陰のある手軽なオープンカフェ（注文しなくても休んでいられる空間）くらいは配置してもらいたいものである。ホテルのロビーもどんどん狭くなっている。

3 特別なホスピタリティ空間に関するケーススタディ

以上、公共空間と民間空間のホスピタリティについて、居住者と来訪者というホストとゲストの関係を前提にして論じてきたが、観点を变えて、ホストとゲストに関する軸を大人と子供に入れ替えて研究した事例を、東京女学館大学国際教養学部2年渡辺紗希と筆者が日本ホスピタリティマネジメント学会全国大会で平成18年7月に発表した「人と子供の交流のためのホスピタリティ空間に関する考察」²⁾に基づいて紹介する。

3.1 大人と子供の交流に関するアンケート調査

アンケートは平成18年1月下旬から2月上旬にかけて、日本橋女学館中学・高等学校生121名（有効回答数121名）と、インターネットによりNPO法人日本都市計画家協会会員有志ならびに都市環境デザイン会議有志合計約100名（有効回答数36名）を対象として実施した。設問は、社会人と学生とで異なりそれぞれ表1のとおりである。

表1 アンケートの設問内容

社会人に対する設問	学生に対する設問
1. 退職後の生活についてどのようなビジョンを持っていますか？	1. 学校が終わった後何をしていますか？
2. 趣味はありますか？	2. 1の質問で「友達と遊ぶ」と答えた人に聞きます。遊ぶことは何ですか？
3. 2の質問であると答えた方に質問です。その趣味は何ですか？	3. 2の質問でその理由は何かですか？
4. いつでも気軽に行けて中高生と交流のできる場所があったら行きたいと思いませんか？その理由は何かですか？	4. いつでも気軽に行ける自分より年上の方との交流できる場所がありますか？
5. 4の質問ではいかに答えた方に聞きます。そこで中高生にどんな話題で話したいですか？	5. いつでも気軽に行ける場所があったら行こうと思いませんか？
6. 4の質問でいかに答えた方に聞きます。どのような企画があったら参加しやすいですか？	6. 5の質問でいかに答えた人に聞きます。どのような企画があったらその場に行きたいと思いませんか？
7. 中高生にどのような印象をお持ちですか？	7. 55～60代の方にどのような印象を持っていますか？
8. 中高生との交流をどう思いますか？	8. 5の質問でその場に55～60代の方がいたらどのような期待をしますか？
	9. 55～60代の人達との交流をどう思いますか？
	10. 55～60代の方達と会話をしたいと思う話題はありますか？
	11. 会話の中で興味のある仕事や事柄についてその人から学びたいと思いませんか？

9. このような交流できる場所があったら行きたいと思いませんか？	12. 11のような交流できる場所があったら行きたいと思いませんか？
----------------------------------	------------------------------------

アンケートの結果によれば、社会人も学生もかなり積極的であり、どちらも賛成・やや賛成を合わせた意見が全体の80%近くとなっている。つまり、うまく提案すれば多くの賛同が得られるであろうことが示唆されたのである。

先ず場所については、地域の利便性の高いところに位置し、出入の抵抗が少ないところが望ましいが、活動主体が町内会やNPO法人であろうから、もともと財政力の強い団体ではなく、もっぱらボランティア的に活動するであろうことを考えると、閉鎖店舗を公共団体に借り上げてもらって、活動主体が公共団体から借り受ける場合とか、所有者の自発的協賛により維持管理費程度で借り受けることが出来る場合とかに限定されてくる。

次に内容であるが、アンケート結果に基づいて考察した結果、表2のようにまとめることができた。

これは一例ではあるが、このような空間を都市内に用意することにより大人と子供が交流できれば、そこから自ずと都市空間にホスピタリティ精神が生まれてくるのではないかと考えられる。このような人と人の交流空間を例示すると、会員制のスポーツクラブ、各種カルチャースクール、趣味の集まりなどがあるが、これらは地域に密着したものではなく、必ずしも昔の縁台や井戸端のようなきめ細かい配置はなされていない。つまり、都市空間が利益追求型、かつ、無機的になってきているといえよう。唯一可能性があるとするれば、それは夏の盆踊りや祭礼であろうか。これも地域にしっかりした檀家会や氏子会がっていることではあるが。

表2 交流空間の活動内容案

分類	活動内容
運動	テニス、ゴルフなどであろうが、ここでは実技を含まず、コンピューターゲームを通じて大人と子供が一緒に楽しむ。
音楽	ピアノ、オルガン、ギター、エレキギター、バイオリン、フルート、ハーモニカ、アコーディオンなどの演奏と、DVD などによる音楽鑑賞が考えられる。地元で提供してもらえる楽器の種類やDVD などに応じて柔軟に対応する必要がある。近隣の騒音も問題である。
旅行	実際の旅行に動いて行くわけには行かないので、旅行雑誌の読み比べ、パワーポイントなどによる発表会になる。
絵画・美術 + 写真	音楽と同じく製作と鑑賞に分かれる。水彩画、油絵などの道具が借りられれば実技もあり得るが、キャンバス、筆、絵の具などの費用がわかる。鑑賞であれば地元から全集などを寄付してもらえれば、共に楽しむことが可能となる。
読書	これは地元から書物を寄付してもらえれば良いが、書棚の置き場所や本の管理問題がある。
ものづくり	プラモデルなどを作るのであろうが、材料がわかる。
料理	大人からは蕎麦打ちの提案があるが、これを作る方も食べる方も大変なので常時とは異なる。また、子供が未成年なのでアルコールは出せないから、軽食お茶菓子程度の料理可能である。ただし、材料費、光熱費、調理器具等の負担と防火策が必要になる。
都市研究	コンサルタントなど人材さえあれば可能である。
映画鑑賞	DVD により可能である。
歴史研究	良き指導者さえいれば可能である。
談笑	一番簡単であるが、どうやって継続させるか。
インターネット	接続費用を負担する必要がある。また、ホームページによる地域マガジンの発行が望まれる。

4 ホスピタリティ空間の用途別、時系列的分類とその評価

さて、これらの公共空間、民間空間を用途別、時系列的に分類してみる。特に筆者が再度来たいと思ったことのある空間について、ゴシック・イタリック表示にした。ここで、旅館、料亭など必ずしもホスピタリティ空間というのが適当でないかもしれない商業施設も、そこにおいてゲストとホストの関係が成立し得る場合はそれらを含んで整理してみた。また、港湾のように、決して港湾そのものに来たいわけではなく、その景色、食べ物等にひかれていた場合であっても、表現上は港湾としてある。

この表全体から読みとれることは、再度来たいと思わせる要因として景観、接遇、飲食物、歴史的・文化的雰囲気、教養、娯楽等をあげることができる。また、これらの要素は多少の形態的变化はあろうとも、江戸時代から現代まで基本的に変わっているものではなく、将来にわたっても大きく変わることはないと考えられる。ただし、人件費の高騰により部分的に自動化、IT化される傾向がみられ、何処までをホストとゲストの関係と見なすかが困難になりつつある。

表3 ホスピタリティ空間の用途別・時系列的分類

(ゴシック・イタリック表示は筆者の経験による、再度来たいと思わせる要因となったことがある空間)

用途	江戸時代	現代	将来
地域の入り口空間	関所、木戸、橋、門、道標、峠の茶店	空港、 港湾 、鉄道駅、バスターミナル	空港、港湾、鉄道駅、バスターミナル
地域の交通・案内空間	一里塚、橋のたもと、渡し場、茶店	観光案内所、駅舎、ターミナル、サービスエリア、道の駅、道路標識 (他に雑誌、地図、看板、Web)	観光案内所、ターミナル、サービスエリア、道の駅、(カーナビ、携帯電話等の新技術に移行)
宿泊空間	宿場の旅籠	ホテル、旅館、民宿	ホテル、農家民宿
飲食空間	茶店、食堂、料理屋、屋台	料亭、小料理、スナック 、レストラン、食堂、パブ、 屋台 、居酒屋	レストラン、スナック、パブ、居酒屋
娯楽空間	芝居町、大道芸、寺社境内の芝居小屋、岡場所	劇場 、映画館、演芸場、音楽ホール、ゲームセンター、 スポーツ施設 、 温泉 、キャンプ場、風俗店	劇場、映画館、演芸場、音楽ホール、ゲームセンター、スポーツ施設、温泉、キャンプ場
宗教・文化・教養空間	神社、仏閣	神社、仏閣 、教会、 美術館、博物館 、図書館、カルチャーセンター	神社、仏閣、教会、美術館、博物館、図書館、カルチャーセンター
ひと休み空間	茶店、道端、井戸端	公園、 庭園 、 オープンカフェ	公園、庭園、広場、歩道のベンチ、オープンカフェ
ぶらぶら歩き空間	寺社境内、川端	公園、川端、緑道、 モール	公園、川端、緑道、モール
庶民の居住空間	長屋	文化住宅、公営住宅、アパート、狭い戸建て	公営住宅、アパート(管理の悪い高層住宅を含む)、狭い戸建て

5 結論

さて、以上の考察から都市におけるホスピタリティ空間について次のようにまとめることができる。

- (1) 都市のホスピタリティ空間とは公共空間と民間空間との調和の上に成り立っている。
- (2) 公共空間は優れた民間空間を誘導する役割をもつ。
- (3) 公共空間での工夫の主たるものは電線類の地中化、横断歩道橋の撤去、ストリートファニチャーの設置、照明の工夫、案内標識の整備、緑化などである。
- (4) 上海の公園のように、健康器具を設置するなどのちょっとした工夫で公共空間が有するホスピタリティ機能を向上させることができる。
- (5) 広場空間は我が国においては歴史が浅く、十分こなれていない。地下街と合わせてその設計、利用方法、管理方法などを更に研究する必要がある。
- (6) 民間空間はそれぞれに工夫が必要とされる。この場合、歴史的地区などのように伝統に基づくルールが存在する場合は、それに基づいて地域が協力することにより優れたホスピタ

リティ空間を形成することができるが、そうでない場合は建築協定、地区計画、まちづくり総合支援事業などを活用して地域の共通目標や調和を生み出すことが必要となる。

建築物について考察してみると、代価を要求しないホストとゲストとによる本来のホスピタリティ空間が消滅しつつある。人件費の高騰や競争の激化によるものと思われるが、もっと設計上のゆとりを持ってホスピタリティ精神に基づく配慮をすることが必要である。

(7) 都市のホスピタリティ空間を時系列的にみても、その形態は時代と共に変化してはいるが、本質的に目的、もてなしの方法などに変化は無く、一部が自動化、IT化するとしても、十分に時間を超えて伝承できるものと考えられる。

(8) いずれにしても、そこに住む人々のホスピタリティ精神がゴミのない美しいまち、色彩や建物の整っている落ち着いたまち、また来たくくなるような情を感じるまちを形成するので、公共空間が率先して景観や歴史を形成し、民間が歴史、文化、飲食物、人情、スポーツ・買い物等の何らかの楽しみを通じて来訪者にまた来たくくなる印象を与えることが必要である。そのためには地域に密着した大人と子供の交流空間を提供するとか、寺社を中心にした行事などにより地域の人々の交流を促進させる努力も必要であろう。

参考文献

- 1) 小浪博英「都市におけるホスピタリティ空間」日本ホスピタリティマネジメント学会関東支部研究発表会発表論文 2006年5月
- 2) 渡辺紗希、小浪博英「人と子供の交流のためのホスピタリティ空間に関する考察」日本ホスピタリティマネジメント学会全国大会発表論文 2006年7月
- 3) 渡辺裕康「大規模閉鎖空間における空間認知に関する研究」東洋大学大学院国際地域学研究科修士論文 2004年3月

A Study on Urban Spatial Management from the View Point of Hospitality

Hirohide Konami

Abstract

Spatial planning in urban area is one of the most important issues for the creation of attractive urban space. This report examines the way to create more attractive urban space from the view point of hospitality spirit. Following 8 points are pointed out.

- 1) Hospitality space in urban area consists of public and private spaces in good balance.
- 2) Better public space has an influence on private space to induce better way.
- 3) Proposed ideas to improve public space are to eliminate electric cables from the sky, to eliminate pedestrian bridges, to install street furniture, to improve lightings, to improve guide signs and tree plantings.
- 4) Hospitality function of public space may be improved by some tiny ideas such as to attach health exercise tools at the corner like in Shanghai.
- 5) The technique of spatial planning of common space in Japan has rather short history, if we compare with that of western world, and more careful studies are required for them and for under ground public spaces.
- 6) Private space can be improved by the community efforts to identify the history and rules of the area and to keep them by means of building agreement, district planning and some improvement projects. It would be pointed out that the common spaces in buildings are getting to be more commercial based design and losing their spiritual allowance.
- 7) Time trend of hospitality space in urban areas shows not so big change for these hundreds of years in their purposes and way of welcoming except some automations and the installation of IT techniques.
- 8) As a whole, the cooperation of public and private is the most important issue. The installation of regional voluntary meeting space of adults and children and the vitalization of festivals of shrines and temples may contribute to keep good coordination in the area. Public spaces should be always clean and beautiful and private spaces follow to create advanced hospitality spirit in history, culture, food, atmosphere, sports, shopping and other activities. Then visitors will feel to come again.

Key words: spatial plan, spatial management, hospitality, urban attractiveness